厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
男性同性間のHIV感染対策とその介入効果に関する研究

大阪地域における男性同性間のHIV感染予防介入研究

研究分担者：鬼塚哲郎（京都産業大学）
研究協力者：山田創平（京都精華大学）、辻宏幸、後藤大輔（財団法人エイズ予防財団）、
内田優、町登志雄、有田匡、中村文昭、鍵田いずみ、赤田知華子、原澤俊也、
祝雄一、大畑泰次郎（MASH大阪）、木村博和（横浜市健康福祉局）、
コーナー・ジェーン、塩野徳史(名古屋市立大学看護学部/財団法人エイズ予防財団)、
日高庸晴（宝塚大学）、金子典代、市川誠一（名古屋市立大学看護学部）

研究要旨

平成22年度、MASH大阪は以下のような研究事業を実施した。

1. 以下の介入プログラムを執行した：

1) コミュニティレベルのプログラムとして、
月刊のコミュニティペーパー＜SaL+＞の発行を継続して行った。昨年度に引き続き本年度も、エイズ予防/セクシュアルヘルス関連情報を前面に押し出す方式を採用した。平成22年4月～平成23年1月の期間に、月平均で、190店舗および40団体に18.5名のボランティアが6500部を配布した。コミュニティペーパー＜SaL+＞のエイズ予防啓発メディアとしての特徴を明らかにするため、これまでに発行された＜SaL+＞について、文学的・文化研究的視点から読み返し、特集記事のテーマおよび文体の変遷、特集記事とコラム記事の関連性、の 2 点にフォーカスしつつ分析を行なった。その結果、1号から95号まで一貫してみられる特徴として、1)多声的な言説空間の構築がめざされている、2)セクシュアル・マイノリティであることを問題視しない、3)セックスを肯定的に捉える、4)HIV 陽性であることを特別視しない、5)文体は「笑い」（ユーモアとアイロニー）を基本とする、がみられた。変遷をたどる読みから見えてきた特徴としては、全95号は第1期（1号～12号）、第2期（13号～76号）、第3期（77号～95号）の三期に分類された。また、その変遷の要因として、MASH大阪と店舗との関係性の変化（開店したとき既にMASH大阪の事業が展開されているケースが増加）、編集長の性格、コミュニティ側のHIV関連情報に対するリアクションの変化（忌避から容認へ）の3点が示唆された。

2) グループ・個人レベルのプログラムとして、
①ドロップインセンター＜dista＞関連事業を執行した。平成22年4月～平成23年1月の期間に、月平均855.6名が来場した。そのうち初来場者は月平均97.7名で期間全体としては977名であった。来場者数・初来場者数のいずれも前年比で増加している。相談件数は期間全体としては178件であった。相談体制の強化と今後の体制構築を目的とした「コミュニティセンターにおける対人支援」についての会議を設け、相談事例と対応内容についての共有を行い、利用者に対し適切な支援をするために必要な基礎知識やリソース先の整理、技術の習得を促した。
②STI勉強会＜Café Chat＞を執行した。毎月趣向を変え工夫を凝らして開催し、参加者は2

名～20 名であった。

③若年層ネットワーク構築支援プログラム＜Step＞を 4 月、5 月、7 月、8 月、11 月に開催、総計 180 名が参加、うち 133 名がドロップインセンター＜dista＞を利用した。

④ハッテン場におけるセーファーセックス促進環境整備プログラム＜ハッテン場プロジェクト～β～＞（商業系ハッテン場等でのコンドーム普及 100%作戦）を執行した。今年度は、「大阪のハッテン場において顧客がセーファーセックスを実行できる環境を提供するためのガイドライン」の作成に向け、ハッテン場オーナー・店長へのヒアリング」を継続的に行なった。

2. 上記介入プログラムの効果評価ツールとして、平成 20 年度に引き続きクラブ顧客層を対象とした質問紙調査（クラブ調査）を実施した。（別稿参照）。

A. 研究目的

本研究の目的は、平成 22 年度に執行された研究事業を記述・分析し、効果評価と照合することで、個別施策層向け予防介入事業のモデル構築を試みるところにある。

B. 研究対象と方法

本研究の対象は平成 22 年度（2010 年度）に MASH 大阪によって執行された予防介入プログラムであり、後述する効果評価の結果と比較検討したうえで考察を加える。比較検討、考察にあたっては、疫学とその周辺領域のみならず、組織論、ソーシャルマーケティング理論、社会学といった広い領域からの言及を行うこととする。

C. 研究結果

各プログラムの執行状況について順次報告する。

①コミュニティペーパー＜SaL+＞の配布

（これまでの流れ）

2000ー2002 年度に開催された臨時検査イベント SWITCH を通して得られた情報をコミュニティに還元するためのツールとして構想された＜SaL+＞は、2003 年度に入りコミュニティペーパー的性格を強めながらコミュニティに浸透してきた。

2004 年度実施したフォローアップ調査の結果、関連知識、受検行動、予防行動のいずれにおいても、受取り群には非受取り群と比較して有意な効果がもたらされた事が示唆された。

平成 21 年度からは、コミュニティ関連情報よりも、セクシュアルヘルス関連情報を前面に打ち出す方向転換を行った。具体的には下記の 2 点である。

1) 特集記事において、エンタテイメント性を保ちつつエイズ予防/セクシュアルヘルス関連のテーマを取り上げる。
2) 医師や MSW または検査技師等、専門職者のインタビュー記事を掲載する。

（目的）

- MASH 大阪が把握している情報をコミュニティに還元する。
- 配布活動を通じて、コミュニティとのネットワークを構築する。
- 地域に密着した情報を発信し共有化をはかることで、コミュニティへの帰属意識を涵養する。

（方法）

今年度も昨年同様の編集方針で進め、発行部数もほぼ同程度で行なった。

コミュニティペーパー＜SaL+＞のエイズ予防啓発メディアとしての特徴を明らかにするため、文学的・文化研究的視点から読み

返し、特集記事のテーマおよび文体の変遷、特集記事とコラム記事の関連性、の 2 点にフォーカスしつつ分析を行なった。

（成果）

今年度の配布実績は(1 月末までの時点で)毎月平均で、190 店舗と 40 団体に 18.5 名のボランティアスタッフが約 6458 部を配布した。また、6 月ー9 月までの 4 ヶ月間は、SaL+の発行部数を 1000 部増刷した。

年間を通して、発行部数のほとんどは、ゲイタウンや地域団体への配布であるが、夏ー秋にかけては大型のイベント会場等でも配布した。

コミュニティペーパー＜SaL+＞のエイズ予防啓発メディアとしての特徴を明らかにするため、これまでに発行された＜SaL+＞について、文学的・文化研究的視点から読み返し、特集記事のテーマおよび文体の変遷、特集記事とコラム記事の関連性、の 2 点にフォーカスしつつ分析を行なった結果、1 号から 95 号まで一貫してみられる特徴として、1)多声的な言説空間の構築がめざされている、2)セクシュアル・マイノリティであることを問題視しない、3)セックスを肯定的に捉える、4)HIV 陽性であることを特別視しない、5)文体は「笑い」（ユーモアとアイロニー）を基本とする、がみられた。

変遷をたどる読みから見えてきた特徴としては、全 95 号は第 1 期（1 号～12 号）、第 2 期（13 号～76 号）、第 3 期（77 号～95 号）の三期に分類された。第 1 期では記者・編集者の声が中心であるのに対し、第 2 期では記者・コミュニティメンバー・専門職者の声が交じり合う傾向が強くなり、第 3 期ではこれに加え科学的・制度的言説（シグナル）と個人の観測・感情・破綻（ノイズ）が混在していることがあげられた。また、こうした変遷の要因として、MASH 大阪と店舗との関係性の変化（開店したとき既に MASH 大阪の事業が展開されているケースが増加）、編集長の性格、コミュニティ側の HIV 関連情報に対するリアクションの変化（忌避から容認へ）の 3 点が示唆された。

②ドロップインセンター＜dista＞

（目的）

大阪地域のゲイ男性が利用する商業施設が多い地域に啓発普及の活動拠点を整備・運営し、HIV/STI 感染予防に向けた啓発プログラムを戦略的に展開することを事業の目的とする。ドロップインセンターの機能は以下のとおり。

〇予防啓発事業の拠点機能として

・啓発活動およびアウトリーチのベース基地（啓発の実施・普及機能）

・予防啓発に関わるスキル研修会・講習会会場（人材育成機能）

・セーファーセックス勉強会やワークショップ会場（啓発普及機能）

〇情報センター機能として

・コミュニティの人がふらっと自由に立ち寄れて、セクシュアルヘルスに必要な情報やコミュニティの情報を持ち帰ることができる（情報の還元・普及機能）

・相談場所・窓口（相談機能）

〇コミュニティセンター機能として

・コミュニティ交流プログラム会場（地域交流機能）

・コミュニティからのリアクションをフィードバックさせる（情報収集機能）

・リピーターを獲得し、その人達と相互に確実な情報伝達をくりかえすことによって、コミュニティ内のキーパーソンの育成をはかる。

（対象クライアント）

対象クライアントとして以下を想定した。

1. ゲイ関連施設従業員
2. ゲイ関連施設利用者
3. インターネット利用者
4. エイズ対策関連団体／個人

（成果目標）

成果目標として以下を想定した。

・当事者性を重視した予防啓発活動を、コミュニティの中心エリアで実施し、コミュニティメンバーや関係機関との連携・協働により、セクシュアルヘルスの増進、セーファーセックスへの環境づくりを目指す

・dista を核としたコミュニティ・ネットワークを構築し、そのネットワークを通じて HIV/STI の予防や共生のメッセージと正しい情報が伝わってゆくことを目指す。

・情報と空間・時間を共有し、HIV を身近に感じる人が増えていくことで、HIV/AIDS の予防と共生の意識がコミュニティ全体に広がり、行動変容を促すことを目指す。

（運営体制）

2010 年度は基本オープン時間を水曜日～月曜日の 17 時ー23 時とし、火曜日を休館日とした。土曜日には不定期でイベントを開催しその際はオープン時間を 17 時ー5 時とした。17 時ー20 時を A シフト、2 時ー23 時を B シフト、及びイベント開催時の土曜日の 23 時ー5 時を C シフトとして、運営スタッフとコンシェルジュ（ボランティア・スタッフ）がシフトを組んで dista 運営業務に当たった。コンシェルジュは現在 4 名が稼働している。

今年度は、より相談機能の強化をめざし、毎月第 3 日曜日に運営スタッフとボランティアスタッフを対象とした dista 運営会議を実施した。

（成果）

今年度の施設オープン時間は月平均 191 時間。来場者数は月平均 855.6 名程度あり、前年度より増加した。そのうち初来場者についても、月平均 97.7 名程度あり、これについても前年度より増加した。初来場者数は全体の 1 割強であった。dista 利用状況及び利用者数年度別推移は【付表 2】【付表 3】、利用者年代別状況は【付表 4】のとおり。

今年度に開催したカフェイベントと教室の実施内容および展覧会内容は【付表 5】【付表 6】のとおり。

相談件数は月平均 17.8 件程度あった。その推移と相談内容は【付表 7】及び【付表 8】とのとおり。

相談体制の強化と今後の体制構築を目的とした「コミュニティセンターにおける対人支援」についての会議を設け、相談事例と対応内容についての共有を行い、利用者に対し適切な支援をするために必要な基礎知識やリソース先の整理、技術の習得を促した。現在、会議と並行して dista に従事する相談員育成を目的とした研修を作成中である。

また、ふらっと来た来場者のうち特に初来場者については、コンシェルジュが積極的にコミュニケーションをとる方針を徹底させたことにより、dista の説明や予防、検査情報を確実に提供できた。

今後の課題として、相談員の育成と、幅広い年齢層に届く広報や企画を催し、新規利用者の獲得と、相談と予防情報の提供を確実に行える予防・支援拠点としての充実を目指す。

③STI 勉強会＜CAFE CHAT＞

（目的）

CAFE CHAT とはエロネタや恋愛ネタを中心に身近で興味をひくようなテーマを設定し、一義的な展開や啓発色の強いメッセージを発信するのではなく、自らの言葉で意見、情報を交換し、多様な性や生活のあり方を認め合いその雰囲気を共有するものである。自分達にとっての SEX を考え、語ることにより、SEX に対する興味や意識を喚起し、SEX と密接な関係にある性感染症に対する認識を促すことを目的とする。

また、SEX の話題の中にセーファーセックスに関する情報を盛り込んだり、プログラムの最後に STI やセーファーセックスに関連

する情報を提供するミニ勉強会を設けることにより、STI やセーファーセックスに対する知識向上と共に予防と共生の意識を浸透させることを目指すプログラムである。

（方法）

実施手法として以下の点を挙げることができる。

・ファシリテーターを設け対話形式での展開を行う。参加者が楽しんで取り組めるようテーマに沿った資材やゲーム等を使用。
・CAFÉ CHAT を問題なく円滑に進行させるためグランドルールを設ける。
・参加者が意見を発し、取り組みやすいような場所や雰囲気を設定する。（カフェ形式 etc）
・プログラム最後 15 分程度の STI 勉強会や、SEX の話題の中にセーファーセックスを意識するような仕掛けを設ける。特に必要な情報として「感染症/経路/症状/対応/検査」「セーファーセックス/行為」「コンドーム/セックスの道具/使い方/入手方法」を盛り込む。

今年度は、毎月第 2 土曜日（4 月～6 月は夜間 20 時～22 時、7 月以降は夜間 18 時～20 時）に実施。対話や相談等の場となることに留意した。また 10 月は、PLuS+FINAL のパビリオンに参加し、毎月使用している dista 外の場所で対話をする機会として運営した。

広報として SaL+や dista.b での告知、mixi 等を用いた。

（成果）

エロネタや恋愛ネタなどの身近なテーマ設定により、参加者の積極的な発言を促すことができた。

それにより実生活に役立つ情報を共有し、実践に役立ててみるという声が聞かれるなど、情報を持ち帰ってもらうことの有意性が感じられた。

また、自身の経験をポジティブに語る機会は自身だけでなく他の参加者の経験に対してもポジティブに捉えることができ、安心して発言ができる雰囲気を作り出すことができた。その結果、性感染予防やセクシュアルアイデンティティの形成において対話することの重要性を実感し、それを共有する機会を作り出すことができた。

プログラム最後に 15 分程度のミニ勉強会や対話の中でセーファーセックスを意識するための仕掛けを設けることで、必要な情報を的確に伝えやすく、参加者への意識づけが可能な機会となった。

回を重ねるごとにスタッフのファシリテーション技術の取得に関して向上が見られ、対話を使った啓発手法を効果的に利用できるようになった。また、企画の立案や情報の伝達の方法等においても参加者の目線に合わせた展開を実践できるようになった。

7 月から実施時間帯を変更したことにより、プログラム実施後に参加者からの相談を受ける時間ができた。

今後も新規クライアントの獲得を目指す場合の広報の手法や、運営体制の見直しを行い、今までのノウハウを活かしつつ更なる充実を目指す。プログラム実施状況は【付表 9】のとおり。

④若年層ネットワーク構築支援プログラム＜step＞

（目的）

コミュニティにあまりアクセスしていない 10 代ー20 代の若者をターゲットとしたプログラムである。プログラムの目的として以下の点が考慮されている。

・コミュニティや、MASH 大阪に未接触の若者に対する入り口となる事。
・参加者が dista へアクセスするようになる事。
・他のプログラムへのボランティア・リクルートになる事。

（方法）

事業は以下の点に留意しつつ展開した。

・啓発色をださず、季節感やお得感、遊びに行く、楽しむ、友達作りなどの企画を実施する。
・コミュニティスペース dista へアクセスするきっかけを提供する。
・mixi（大手の SNS＝ソーシャルネットワーキングサイト）を中心とした広報宣伝を行う。
・プログラムに関わるスタッフの友人の中であまり STI の情報に触れていないクライアントの参加を促進させる。
・企画運営実行は主にコミュニティの若者が中心に行う。

（成果）

今年度は12月末までの時点で6回の企画を実施した。実施内容は【付表 10】のとおり。

参加者は合計 180 名、そのうち初参加者が 62 名、過去に参加経験のある人は 118 名だった。

step 新規参加者の約 2 割が dista を知り、必要なときに dista を利用するようになった。この割合は昨年までと比べて大幅に減少している。これは、既に dista に接触している人が step に新規参加したことによるものである。また今年度は、step 参加経験あり人数が大きく増加した。本プログラムの目的のうち、コミュニティや MASH 大阪に未接触の若者に対する入り口となる事と、参加者が dista へアクセスするようになる事については、今年度はあまり達成できていない。

step 参加者のうち、その後アウトリーチへ参加した者が 9 名、SaL+へ表紙モデルやコラム執筆などで協力した者が 5 名、PLuS+へボランティアとして参加した者が 10 名いた。本プログラムの目的のひとつである、MASH 大阪が実施する他のプログラムへのボランティア・リクルートの機能については、ある程度達成された。step から MASH 大阪が提供する他のプログラムへの接触状況は【付表 11】のとおり。

コミュニティにあまりアクセスしていない層をうまくリクルートできなくなっているため、今後、企画内容や参加者募集のありかたについて再検討を要する。

⑤ハッテン場におけるセーファーセックス促進環境整備プログラム＜ハッテン場プロジェクト～β～＞

（目的）

このプロジェクトは、関西圏の商業系ハッテン場において、利用者に対して十分な量のコンドーム及びローションが、セックスが行われる場所からなるべく手の届く範囲において提供されるための環境を構築するために実施される。

商業系ハッテン場は、不特定多数の MSM がセックスすることを目的として集まる場所であることから、MSM のセクシュアル・ネットワークにおいて、中心性が強い空間であるといえる。実際にセックスを行なう空間であり、かつ会話などのコミュニケーションなしにセックスが成立する空間であるため、セーファーセックスに関するネゴシエーションを事前に行いにくい。そのため、この空間におけるセーファーセックスの実践は「利用者個々人の意識・態度」ならびに「施設の雰囲気・環境」に大きく左右される。そこで本プログラムにおいては「施設の雰囲気・環境についての介入」を試みる。

京阪神圏の商業系ハッテン場において、利用者がセックスを行なうのに十分な量のコンドームとローションが、セックスが行われる場所からなるべく手の届く範囲において提供される環境を、施設と十分に協議しながら構築する。

そして、利用者に対して安定的に継続してコンドームとローションが提供された場合のコンドーム使用率など、行動変容の推移を測定する。

（方法）

このプログラムでは、関西圏の商業系ハッテン場の現地観察調査、オーナー・店長へのインタビュー調査(質問紙調査含む)、施設利用者へのインタビュー調査、利用者への質問紙調査、コンドームとローションの提供プログラムを組み合わせて実施し、関西圏の商業系ハッテン場において、コンドーム及びローションが利用者に対して十分な量で無償提供されるための環境を構築し、それに伴って利用者の感染予防行動がどのように変容するかを調査する。

（事業の成果）

今年度は、「大阪のハッテン場において顧客がセーファーセックスを実行できる環境を提供するためのガイドライン」の作成に向け、ハッテン場オーナー・店長へのヒアリングを継続的に行なった。

このガイドラインに加盟することに対してはどの施設も協力的であった。特に日頃からコンドームを設置するなど積極的にSafer Sex を推進している施設については他の施設との差別化ができ、安全にセックスを楽しめる施設であるというサインになるとの理由からより協力したいという意思が感じられた。その一方で、ローションの設置・無料提供について難色を示す施設が数件あった。布団が汚れる、いたずらで撒き散らす人がいる等、管理の困難さを危惧するような理由が主だった。来年度に向けて、ヒアリングで得られた意見をもとにガイドライン案を修正し、さらにヒアリングを継続して実施する予定である。

D. 考察

年度初頭に掲げた研究計画の項目にそって、研究事業の実施状況を総括する。

（プログラム関連）

- ドロップインセンター＜dista＞は、計画通りに執行され、利用者及び新規利用者が増加した。
- コミュニティペーパー＜SaL+＞は、計画通りに執行された。
- 若年層のネットワーク育成＜Step＞は、計画通りに執行されたが、ターゲットとする層からのリクルートに課題を残す結果となった。
- STI 勉強会＜Café Chat＞は、プログラムの質、参加するクライアント数ともに前年までの水準が維持された。
- ハッテン場プロジェクトは、ガイドライン作成に向けたハッテン場オーナーとのヒアリングを継続的に行なった。

（アウトリーチ関連）

- 新世界地区での新規開拓が若干進展した。

（アドボカシイ関連）

- 行政との協働事業の展開としては、新たに兵庫県との関係構築が進展した。また、大阪市が予防指針の改定に着手し、これに協力している。
- CBO との連携事業の展開としては、これまでの継続にとどまり、特に新しい進展はみられなかった。

（研究関連）

- 平成 20 年度に引き続きクラブ利用者調査が実施された。
- コミュニティペーパー＜SaL+＞が MSM に対して訴求力を持つ要因を明らかにすべく、文化研究の手法を用いた分析を行った。HIV 感染対策研究に人文学を応用する新たな試みであった。

（学会等での情報発信）

- 1st Developed Asia Regional Consultation on HIV in MSM and TG において、口頭発表をおこなった。
- 日本エイズ学会において、シンポジウム

を企画・運営したほか、展示ブースを設置した。シンポジウムにおいては領域を横断しつつ様々な専門家から国際的な情報が提示され、議論が展開された。

E. 結語

1. プログラムはおおむね計画通りに継続された。コミュニティペーパー＜SaL+＞は、すでに長期間継続的に実施されているものであり、その効果も実証されている。本年度の新たな分析から、本資材がMSM に対する高い訴求力を維持できている要因の一端が明らかにされ、新たなエビデンスを蓄積することができた。事業化によるプログラムの継続が強く望まれる。
2. ハッテン場への予防介入プログラムは、顧客がセーファーセックスを実行できる環境を、施設側が提供するためのガイドライン作成に向け交渉を継続しており、次年度以降の運用を目指している。

F. 発表論文等

（研究論文）

1)金子典代、市川誠一、辻宏幸、鬼塚哲郎：健康教育ツールを開発しよう、計画③対象者にひびくメッセージをつくろう、保健師ジャーナル, 2008,64 巻 1 号,82-89.

2)鬼塚哲郎、山田創平：感染に脆弱な集団にどう予防介入するか～マイノリティ集団における一次予防、二次予防、三次予防のあり方を検証する, 治療学, vol.42-no.5, 2008.

（国内学会発表）

1)山田創平、鬼塚哲郎、辻宏幸、後藤大輔、鍵田いずみ、内田優、町登志雄、塩野徳史、市川誠一：商業施設を利用する MSM（Men who have Sex with Men）向け HIV 感染予防プログラムの開発に関する形成的研究、第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会、2009 年 11 月 26 日.

2)鬼塚哲郎、山田創平：「HIV 感染対策研究への地域研究の応用」,第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会,2009 年 11 月 27 日.

3)山田創平、鬼塚哲郎：HIV 感染対策研究における人文学の応用可能性その 2, 第 24 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2010 年 11 月 24 日.

（国際学会発表）

1)Tetsuro Onitsuka, Jane Koerner, Noriyo Kaneko, Seiichi Ichikawa：The HIV/AIDS epidemic among MSM in Japan: Background & gay NGO responses, Satellite Symposium on HIV infection in developed east and south-east Asia, ICAAP Bali, 11 Aug 2009.

2)Tetsuro Onitsuka, Jane Koerner, Noriyo Kaneko, Hiroyuki Tsuji, Daisuke Goto, Yukio Cho , Satoshi Shiono, Suguru Uchida, Mie Takenaka, Seiichi Ichikawa : HIV infection rates, risk & preventive behaviors of MSM in Asia: How does Japan compare?, poster presentation, ICAAP Bali, 10 Aug 2009.

3)Tetsuro Onitsuka, Jane Koerner, Noriyo Kaneko, Sohei Yamada, Satoshi Shiono, Hiroyuki Tsuji, Daisuke Goto, Toshio Machi,Sachiko Omori, Hirokazu Kimura, Seiichi Ichikawa : HIV risk & sexual behaviors of Middle Aged MSM: Findings from the 2007 Osaka bar survey, poster presentation, ICAAP Bali, 10 Aug 2009.

4)Tetsuro Onitsuka, Hiroyuki Tsuji, Jane Koerner, Noriyo Kaneko, Seiichi Ichikawa：The HIV/AIDS epidemic among MSM in Japan: Background & gay NGO responses, 1st Developed Asia Regional Consultation on HIV in MSM and TG, Singapore, 2nd-3rd, Dec. 2010.

【付表 1：SaL+配布実績- 2010 年度（1 月末時点)】

期間	配布された施設 (昨年度の数値)	送付団体・個人 (昨年度の数値)	配布された部数 (昨年度の数値)	配布スタッフ延べ数 (昨年度の数値)
2010 年 4 月	193 店舗(185 店舗)	40 団体（38 団体)	6658 部(6503 部)	18 名(18 名)
5 月	185 店舗(185 店舗)	40 団体（38 団体)	6708 部(6418 部)	16 名(20 名)
6 月	191 店舗(186 店舗)	39 団体（37 団体)	6762 部(6613 部)	16 名(19 名)
7 月	187 店舗(186 店舗)	39 団体（38 団体)	7077 部(6668 部)	21 名(25 名)
8 月	187 店舗(190 店舗)	39 団体（37 団体)	6712 部(6393 部)	23 名(16 名)
9 月	192 店舗(187 店舗)	39 団体（118 団体)	6687 部(7140 部)	32 名(26 名)
10 月	193 店舗(186 店舗)	41 団体（37 団体)	6697 部(6533 部)	16 名(28 名)
11 月	193 店舗(186 店舗)	42 団体（39 団体)	6845 部(6563 部)	17 名(20 名)
12 月	192 店舗(190 店舗)	42 団体（37 団体)	6720 部(6595 部)	12 名(7 名)
2011 年 1 月	191 店舗(187 店舗)	42 団体（39 団体)	6720 部(6588 部)	14 名(16 名)
2 月	店舗(186 店舗)	団体（40 団体)	部(6558 部)	名(23 名)
3 月	店舗(189 店舗)	団体（40 団体)	部(6533 部)	名(23 名)
4 月〜1 月	月平均 190 店舗	月平均 40 団体	月平均 6458 部 合計 64586 部	月平均 18.5 名 合計 185 名

【付表 2：dista 利用者状況- 2010 年度（1 月末時点）】

期間	MASH 大阪 業務利用者 (うち初来場者)	イベント来場者 (うち初来場者)	ふらっと来た人 (うち初来場者)	貸し出し (うち初来場者)	合計 (うち初来場者)	稼働時間
4 月	108 名(13 名)	233 名(24 名)	586 名(49 名)	0 名(0 名)	927 名(86 名)	187 時間
5 月	95 名(1 名)	232 名(49 名)	648 名(43 名)	22 名(11 名)	997 名(104 名)	215 時間
6 月	121 名(8 名)	158 名(16 名)	469 名(29 名)	6 名(0 名)	754 名(53 名)	183 時間
7 月	112 名(5 名)	142 名(21 名)	585 名(51 名)	12 名(4 名)	851 名(81 名)	192 時間
8 月	103 名(1 名)	188 名(46 名)	561 名(59 名)	25 名(0 名)	877 名(106 名)	186 時間
9 月	172 名(9 名)	135 名(28 名)	500 名(33 名)	32 名(1 名)	839 名(71 名)	196 時間
10 月	186 名(12 名)	355 名(68 名)	652 名(126 名)	13 名(0 名)	1206 名(206 名)	211 時間
11 月	101 名(9 名)	301 名(96 名)	388 名(20 名)	27 名(0 名)	817 名(125 名)	190 時間
12 月	55 名(2 名)	297 名(50 名)	352 名(34 名)	3 名(3 名)	707 名(89 名)	189 時間
1 月	56 名(0 名)	121 名(5 名)	371 名(38 名)	33 名(13 名)	581 名(56 名)	161 時間
2 月	名(　名)	名(　名)	名(　名)	名(　名)	名(　名)	時間
3 月	名(　名)	名(　名)	名(　名)	名(　名)	名(　名)	時間
年度合計	1109（60 名)	2162 名（403 名)	5112 名（479 名)	173 名(32 名)	8556 名（977 名)	1910 時間
月平均	110.9 名 (6.0 名)	216.2 名 (40.3 名)	511.2 名 (47.9 名)	17.3 名 (3.2 名)	855.6 名 (97.7 名)	191 時間

【付表 3：dista 利用者数年度別推移- 2003 年 4 月〜2010 年 1 月末】

年度	合計	月平均
2003 年度（平成 15 年度)	3436 人	286.3 人
2004 年度（平成 16 年度)	5910 人	492.5 人
2005 年度（平成 17 年度)	6187 人	515.5 人
2006 年度（平成 18 年度)	8402 人	700.2 人
2007 年度（平成 19 年度)	9377 人	781.4 人
2008 年度（平成 20 年度)	9749 人	812.4 人
2009 年度（平成 21 年度)	9815 人	817.9 人
2010 年度（平成 22 年度) 1 月末現在	8556 人	855.6 人

【付表 4：dista 利用者年代別状況- 2010 年度（1 月末時点）】

期間	～10 代	20 代	30 代	40 代	50 代～	合計
4 月	51 名	514 名	262 名	72 名	28 名	927 名
5 月	26 名	546 名	306 名	87 名	32 名	997 名
6 月	14 名	421 名	216 名	85 名	18 名	754 名
7 月	15 名	503 名	238 名	72 名	23 名	851 名
8 月	16 名	515 名	243 名	77 名	26 名	877 名
9 月	10 名	453 名	252 名	87 名	37 名	839 名
10 月	22 名	575 名	428 名	135 名	46 名	1206 名
11 月	8 名	398 名	290 名	85 名	36 名	817 名
12 月	5 名	371 名	239 名	69 名	23 名	707 名
1 月	6 名	301 名	181 名	73 名	20 名	581 名
2 月	名	名	名	名	名	名
3 月	名	名	名	名	名	名
合計	173 名	4597 名	2655 名	842 名	289 名	8556 名
月平均	17.3 名	459.7 名	265.5 名	84.2 名	28.9 名	855.6 名

【付表 5：主たる dista カフェイベント及び教室・講座の実施内容一覧- 2010 年度（1 月末時点）】

イベント名	イベント・教室の内容
Alt Café	陽性者を対象にしたクローズド形式の親睦カフェ。月 1 回、第 2 土曜日の昼間に開催
White forest	陽性者を対象にしたクローズド形式の親睦カフェの夜間版。年 1 回開催
Café CHAT	SEX について、STI についてのトークを織り交ぜ、参加者に自らの SEX を振り返ってもらい、STI の予防を促進させる。月 1 回、第 2 土曜に開催
Salon de ONI	ワインを楽しみながら、年齢層の高い人も交えてじっくり深い話が出来る空間を提供する。月 1 回、第 4 土曜日に開催。
レインボーアディクションミーティング	LGBT の人たち向けの様々なアディクションからの解放と回復を目的としたグループミーティング。毎月第 4 木曜日に開催。
東方美男	中国茶やスイーツを手軽に楽しみながら、来場者同士でじっくり話の出来る空間を提供する。隔月 1 回、第 1 土曜日に開催。
CAMP!	映画を素材として、参加者と主催者でセクシャルマイノリティに関する話題を展開していくイベント。3 ヶ月に 1 回開催。
虹茶房	地域社会を構成する様々な人達(ヘテロセクシュアル/LGBT/HIV 陽性者)が等しく豊かさを求められるコミュニティ・社会の実現を目指し、ふれ合いの場を提供する。第 4 金曜日に開催
Café STEP	10 代、20 代のゲイ向けの友達作りサークル。季節に合った場所に遊びに出かけ、交流を深める。不定期開催。
tRad ～35 歳からの合コンイベント～	予防においてアプローチしにくい 35 歳以上の MSM を対象に、dista の紹介等を図る
bruit branc	音楽を通して dista の認知度を広げるとともにネットワークの構築を図る。不定期開催。
honey groove	音楽(R&B/HipHop/jazz)を通して dista の認知度を広げるとともにネットワークの構築を図る。
Lounge Nami	ＤＪ＋ドラァグクイーン＋映像によるインスタレーション形式のイベント。ラウンジをコンセプトに、ゆっくり出来る場を提供。単発企画
教室名	
二般ハングル教室	Gay のための韓国語会話教室。教室以外にも温泉旅行に韓国旅行など、メンバーの親睦も図るイベントも行う。隔週水曜、金曜に開催。
Sign-手話教室-	セクシャルマイノリティ対象の手話教室。日本手話でろう者と日常的な会話が出来るようになる事を目的としている。隔週金曜日に開催。
4Q アロマ教室	性別を問わず、もっと身近にアロマセラピーを楽しんでもらうための教室。毎月第 4 木曜日開催。
アートワークショップ　アトリエＰ	様々な画材を使って自由にモノ作りをすることを通して参加者にリフレッシュしてもらい、交流してもらうオープンスタイルのワークショップ。毎月第 3 木曜開催。
たいがーりりぃ	性的マイノリティやセックスワーカーに関する問題を、毎回違うテーマに沿って話しあう対話イベント。毎月第 1 木曜日開催。
呼吸法	メンタルヘルスに大きく役立つ呼吸法について、ビギナー向けにレクチャー&実践し、その良さを周知する。不定期開催。
LGBT の労働相談	地域コミュニティスペース dista にて「労働相談してみよう」をテーマに、職場の環境とカミングアウトについて実施。不定期開催

【付表 6：dista 展覧会の実施内容一覧- 2010 年度（1 月末時点）】

タイトル	アーティスト	期間	来場者数
＋－＝○	equal partner project	4 月 30 日～5 月 15 日	40 名
cricle TATSUYA-Naoki Exhibition	龍谷尚樹	8 月 25 日～9 月 13 日	81 名
オペラグラフィカ VAMPIRE THEATRE Bram Stoker's DRACULA	シモーヌ深雪 オナンスペルマーメイド	9 月 15 日～9 月 27 日	57 名
HOW TO SEX	26 名の作家による企画展	10 月 1 日～10 月 18 日	203 名
東方美人	梅原彩香	11 月 3 日～11 月 15 日	55 名

【付表 7：dista 相談件数の推移- 2010 年度（1 月末時点）】(電話相談・別目的での来場後に相談へ移行したものを含む)

年度＼月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計	月平均
2004 年度	1 件	3 件	4 件	3 件	0 件	1 件	0 件	0 件	0 件	3 件	3 件	0 件	18 件	1.5 件
2005 年度	2 件	2 件	0 件	4 件	1 件	5 件	1 件	1 件	1 件	1 件	0 件	1 件	19 件	1.6 件
2006 年度	6 件	10 件	4 件	0 件	1 件	7 件	1 件	3 件	3 件	6 件	3 件	5 件	49 件	4.0 件
2007 年度	5 件	7 件	23 件	15 件	9 件	7 件	19 件	5 件	5 件	0 件	0 件	2 件	97 件	8.1 件
2008 年度	19 件	10 件	19 件	18 件	20 件	19 件	21 件	32 件	18 件	23 件	20 件	27 件	246 件	20.5 件
2009 年度	10 件	31 件	16 件	26 件	14 件	28 件	19 件	27 件	21 件	3 件	1 件	6 件	202 件	16.8 件
2010 年度	20 件	15 件	29 件	9 件	13 件	25 件	21 件	10 件	12 件	24 件	件	件	1 月迄 178 件	1 月迄 17.8 件

【付表 8：dista 相談内容の状況- 2010 年度（1 月末時点）】

相談内容（複数チェック）		4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	年間合計
A 群	HIV 感染不安		1	1			3	2		2	5			
	STI 感染不安		1			2	4	1		2	3			
	HIV 検査に関する相談／報告		1	1			1		2	2	3			
	STI 検査に関する相談／報告		2	1		1	3	2	1	1	1			
	エイズに関する一般的な質問		1	1										
	HIV+としての生活・制度・支援など	3		2		1	1			2	1			
	HIV+グループ・医療相談機関紹介							1		1	1			
	A 群その他						1	1		1				
B 群	恋愛・セックス	1	1	1	2		4	3	2		5			
	現在のパートナーとの関係	1	1	5	1	1	2	4	1					
	家族との関係について	2		1		2	1	2						
	ライフステージに関する不安・問題 (進学・仕事・就職・結婚・パートナーシップ・老後の生活等)	2	2	5	1		2	2		1				
	経済的な不安／問題	2		1			2	1						
	アイデンティティ、カミングアウト	3	1	2	1			2			2			
	精神的不安、疾患	2		6	1		1							
	薬物使用、依存からの回復	2	3		2	1								
	その他の健康相談			1	1				1					
	B 群その他					4			1		1			
C 群	企業・行政等との協働、NPO/CBO 組織運営								2					
	研究デザイン・論文等													
	C 群その他	2	1	1		1					2			
合計		20	15	29	9	13	25	21	10	12	24			178

【付表 9　Cafe Chat プラグラム実施状況- 2010 年度 1 月末時点】

開催日	企画タイトル	参加者数 (新規参加者)	内容
2010年 1月	「ゲイ春！セックスカルタ会 2010」	7名（4名）	ゲイのセックスや恋愛、性感染症などについての歌が書かれたカルタを参加者で取り合い、詠まれたカルタに書かれている事柄について解説したり、意見交換を行った。 使用資材◆カルタカード
2月	「エロくて温かスキンシップ」	6名（4名）	自分の好みのスキンシップや相手を誘う時に使えるスキンシップテクなどを中心に意見交換を行った。STI 勉強会◆セックス時に想定できるシチュエーションについてこんな時どうする？という内容でケースワークを行った。 使用資材◆記述用紙
3月	「KISS☆ロマン」	7名（0名）	男の口にフォーカスして、イケル口やキスのテクニック、オーラルセックスなど口を伴う SEX プレイを中心に意見交換を行った。STI 勉強会◆感染経路の一つとしての口ということで口腔に感染する STI について解説と意見交換を行った。 使用資材◆口の画像
4月	「セクフレ(？)を作ろう」	5名（1名）	セクフレに求める 8 項目を盛り込んだレーダーチャートを用意し、各自チャートを完成させてそれをもとに意見交換を行った。その後セクフレとの Safer Sex の実行度合いや意識の持ち方等の意見交換を行った。 使用資材◆レーダーチャート
5月	「初めての○○」	7名（6名）	初ゲイタウンや初セックス、初恋などと書かれたサイコロを振り、出た目の内容について発表し、意見交換を行った。自身の体験の振り返りや他者の意見を聞く機会となった。STI 勉強会◆自身が初めて Safer Sex と定義できる行為を実行した時の体験談や、それに纏わるキワードを基に意見交換を行った。 使用資材◆初体験サイコロ
6月	「ア＊ル夜話」	5名（2名）	“アナル”をキーワードとしてそれにちなんだ体験談や疑問点などを共有し、意見交換を行った。STI 勉強会◆アナルを感染経路とする STI について解説を行った。 使用資材◆模造紙
7月	「男のセックス ABC」	7名（5名）	プレイの内容を記したカードをもとに自身の経験を振り返り、実行したことのある行為を ABC のレベルに分類し、意見交換を行った。STI 勉強会◆行為カードを基に STI 感染リスクの可能性について高低座標を用いて分類分けをし、適宜解説を行った。 使用資材◆行為カード、高低座標
8月	「恋人関係のポイント」	2名（1名）	恋人関係を築きたい相手や恋人といる時に、自身がどのような点に気を遣うのかを意見交換した。STI 勉強会◆恋人やセクフレ、その他の関係の場合 Safer Sex に対しどの程度まで意識的か、また、自身のライン引きがどこまで揺らぐのか等、相手と Safer Sex の関係について意見交換を行った。使用資材 ◆気を遣うポイントを記入したカード。
9月	「挿入ナシ！の快感 SEX」	9名（6名）	アナルへの挿入行為以外での気持ちのいいセックスについて意見交換を行った。人体図を用いて具体的なテクニックなども共有した。STI 勉強会◆意見交換で出た行為と部位の関係から STI 感染リスクを洗い出し、その内容について適宜解説を行った。 使用資材◆行為カード、人体図
10月	「PLuS+ FINAL～Chat + P～」	約 20 名	PLuS+FINAL の会場で実施。「健康」と「他者との関係性」の 2 つのテーマを回を分けてそれぞれ意見交換を行った。自身の健康への意識や実行していることを振り返る機会とした。またカミングアウトを切り口に他者との関係性に意見交換を行い、他者との距離感や暴露することのリスクなどについて意見交換を行った。 使用資材◆記述用フリップ
11月	「SEXY SEXY デート」	9名（4名）	デートで行った事のある場所を切り口に、場所と相手との関係や、参加者それぞれのデートの定義について意見交換を行った。STI 勉強会◆デートで行く場所やシチュエーションなど、その時の感情や相手次第で Safer Sex の意識に変化が表れるのかどうか等の意見交換を行った。 使用資材◆付箋
12月	「チンコ meets チンコ」	5名（2名）	ペニスにまつわる話題を中心に、自身の性器や他人の性器について、またペニスを伴うプレイ全般にまつわる意見交換を行った。STI 勉強会◆ペニスが感染経路となる STI を中心に解説を行った。 使用資材◆ペニスにまつわる行為カード、ディルド
1月	「ゲイ春！セックスカルタクイーン杯 2011」	7名（1名）	ゲイのセックスや恋愛、性感染症などについての歌が書かれたカルタを参加者で取り合い、詠まれたカルタに書かれている事柄について解説し、意見交換を行った。 使用資材◆カルタカード